

文学7 (日本のことば)

## 日本語は、むづかしいですか？ その二 — 「あいさつ言葉」 —

萩原 義雄

### はじめに

柳田國男は、『毎日の言葉』新潮文庫刊の「あいさつの言葉」の章で、

「挨拶」は禅僧が支那から輸入した近世の漢語で、挨拶は押す、拶は押しかえす、元は単に受け答えと述べています。そして、「人が顔を合わせて物を言わぬということが有り得ませんから」それに相当することば表現を模索し、「言葉をかける」や「声を掛けた」、名詞でいえば「物言い」がこれに相当することば表現としています。そして敬意を払い、「物申す」の「モノモウ」(室町時代)なる語が用いられてきたというのです。

さらに、  
現在我々の用いて居る「今日は」や「今晚は」などは、形として不完全で、外国人ならば大抵は不審に思うのですが、事によると是も使用の区域が広がった爲に、はつきりとしまいまで言ってしまうことの出来ぬ事情が有ったからかも知れません。

### 1、「おはようございます」

「オハヨウ」は、

本来早く起き出したねと、相手の勤勉を感嘆する意味でありました。それ故に八時九時に顔を洗いだるような朝寝坊に対しては、今でも気の細かい人は、微笑を帯びてで無いと此語を発せません。

(上記資料)

つまりは朝起きを賞嘆したのが始めであります。乃ち惰け者に向つて言うのと皮肉しか聞こえな

かわけで、従つて少し遅くなると之を略し、すぐに天氣の事を言うのが田舎では普通であつたのであります。(上記資料)

とありますように、遅くとも人が活動し始める午前八時前に声を掛け合うものであります。この時間を過ぎて人と顔を合わせる場合には、「オハヨウございました」と過去形で表現したものです。現代人の「おはようございます」は、そうした朝早起きを賞嘆する意味合いが伝わらずに、朝出会えば「おはよう」と声をかけ合い、一日の始まりとする“氣遣いことば”と化しています。ですから、その日はじめて顔を合わせれば、昼でも夜でも「おはよう」と言います。この言い方は、江戸時代の歌舞伎界から始まり、現代の芸能界・放送業界、果ては水商売から今では大学生までに浸透してきています。バンカラ学生の用語では、昭和の頃までは「オッス」という略語表現があつたが、今は聞かれない言葉のようです。さらに現代では、親愛性の表現を持たせてか、「オッハー」といった略形の表現もテレビ番組を通じて全国的に普及していることも事実でしょう。

### 2、「こんにちは」

「コンニチワ」は、

天氣の批評は種類が多く、又実際に即して居ますから、「今日は」見たように空虚には聞こえませんが、是が昔からの早朝の物言いではなかったことは確かで、何か其前にもう一つ、早起きをせぬ者にも通用するようなのが有った筈であります。(上記資料)

とありますように、このことば表現には幾つもの言い回しが略されているからでしょう。これを「余意」や「余情」として、わたしたち日本人が感得できるからにはかなりません。たとえば、

こんにちは、好いお日柄ですなあ。

「こんにちちは、お暑う(お寒う)ございますなあ。」

「こんにちちは、丁度いい時分にお湿りがあって好うございますなあ。」

といった塩梅に「こんにちちは、」の後半部分を読み取る能力を聞く側も備えているからなのです。ところが、この「コンニチワ」ですが、どうも外国の人にとっては「余情」性の理会がむつかしいのか旨く馴染まなかったのも事実です。とはいえ、昭和四十五年の三波春夫さん歌う「日本万博テーマソング」や歌手の梓みちよさんが歌った「こんにちちは赤ちゃん」などは、このことばを活気溢れる、爽やかさをもって日本国中に伝播されたものでした。

### 3、「こんばんは」

「コンバンワ」は、

訪問辞は東京の「今日は」、「今晚は」のように、時刻に相応した途上の挨拶を、其まま流用する人が多くなりましたが、是は我々の家が小さく浅く、先ず案内を乞う必要も無くなってから後のことと思われます。(上記資料)

とありますように、柳田國男の指摘は正しいものでしょう。東北・北海道では、ただ「今晚は」ではなく、「お晩でございます、ござります」と相手に敬意がこめられています。日が暮れ、黄昏で相手の顔を肉眼では判断できない日没の時分に、声を掛けずに過ぎ去ろうとする相手に、その人影(シルエット)を目当てに「たそかれ【誰そ彼れ】」と呼び合うものであります。やがて、夜でも提灯そして電燈が点り、辺りを明るく照らすようになりますと、相手の顔も昼間のように見ることができます。こうなると、「たそかれ」ではありませんから、「今晚は」が用いられたのでしよう。これも「今日は」と同様に、

「こんばんは、何処へお出かけですか？」

「こんばんは、何をなさっていますか？」

と言ったように、後半部分を省略し、その気持ちを相手に伝えるものであります。そして、時刻が遅くなればなるほど、相手の帰宅時間などに心配りして表現することばでありました。

### わが挨拶

「おはよう」「おはようございます」の挨拶表現は、自身の父母に対しても用いることができます。ですが、「こんにちちは」「こんばんは」の挨拶表現は、どうも使い勝手が違うようです。親に向かつては言いがたい。本統の親でもたとえば、長い間留守をしていて、ひよっこり帰ってきた場合は例外です。写真でしか見たことの無い親との再会ですから、子どもは思わず咄嗟に「こんにちちは」「こんばんは」と口をついて表現してしまいます。すなわち、一つ屋根の下で暮らす親子にとつては、この挨拶は必要としないことがこのことでもわかります。では、他人さまであれば、誰とでも用いられるのでしょうか？近所のおじさん・おばさんは良いでしょう。勤め先の同僚はどうでしょう。朝から夕方まで机を並べて働いている相手に、いくら遅刻して出勤したとしても、「こんにちちは」とは用いないのが通例なのです。勤め先で「こんにちちは」と用いる相手は、あくまで外部の間でしかありえませんが、昼飯時に出前のピザ屋さんだったり、出入りのお得意様だったりです。学校でもそうです。いつまでも「こんにちちは」「こんばんは」と言っていたら、自分の仲間意識はいつになっても確立されないことに気づかねばなりません。親しき仲にも礼儀ありのあいさつ言葉ですが、その用い方は能々相手と時分との関係を考えて用いるべきでしょう。

### 「ことばの実際」

室町時代の資料、改修『捷解新語』に見えるあいさつ言葉

◎主「こんにち(今日)わてんきもよう御さつて。御はなし申ましてよろこはしうそんしまする。」

○「こんにち(今日)わおりふしつか急か御さつて御めにかかり急ませいて。」

- 「**こんにち**(今日)わかやうに御ちそう(御馳走)の御さつたことお」  
 ◎主「**こんにち**(今日)わひよりもよし、御たかにゆるりといたして、われわれもうれしう御さる」〔三三五ウ③〕

江戸文学『浮世風呂』に見えるあいさつ言葉

- △ばんとう「どなたもお早うござります。」  
 ○△ばんとう「御隠居さん、今日はお早うござります。」  
 ○点兵衛「これは／＼ 鬼角さま。お早うござります。」  
 ○△おさみ「ヲヤ、お鯛さん。お早うござりますネ。夕は嘸おやかましよう。」  
 ○「ハイ、お早うござります。一兩日はけしからぬお寒さでござります。お杉さん、お出かネ。ヲホ、／＼、いつも御げん氣で能ぞ。お玉さん、けふはお手習はお休かへ。」  
 ○△どろ「おしたさん。お早うございますネ。どうないましたエ。」  
 ○おさみ「アイヨウ、お撥さんか。お早いの△ばち「お早いじやアねへはな。おめへといふものはしよにんな者だの。さうしなせへ。」「勤勉さの意」  
 ○△やす「ハイ。お供で参じましたから、今日は早うござります。」  
 ◎△やみ「ヤ、俳助さん。お早うござりました△はい「くらくてわからぬゆる顔をすかし見てヤ、是は／＼。闇雲屋の吉郎兵衛さん。お早うござります。扱はや、お結構なお日和様でござります。おまへさんはいつも御丈夫さまで、お仕合様でござりますぞ。ハイ／＼、此お天氣の御都合は申ぶんなしぢやが、お暑さはどういたしたものでござりませう。」

〔「返舎」九編』東海道中膝栗毛』のあいさつ表現〕

○けふは愛もとの名どころ一見せんと、したくするうち、ばんとう出て「コレハおはやうござります。今日はどつちやへぞおこしでござりますかいな。さよなら御案内のものおつれなさるがよござりましょ。」

明治時代、アーネスト・サトウ編『春秋雑誌 会話篇』明治六(1873)年刊)のあいさつ表現

- 一、へい だんなさま お はやう ございます 二、なん とき だ〔第四章11才六〕  
 ○イエ色々 御馳走に預りまして私こそ却て今日(こんにち)ハ能御早御出掛なさいました〔第十六章6ウ一〕  
 ○ア、今日(こんにち)ハ良天氣だから御覧なさい マア参詣の人の多事〔第十六章7ウ五〕  
 ○今日(こんにち)ハ天氣が能て御出立には至極結構で御座います〔第十八章25ウ三〕  
 ○今日(こんにち)ハ御昼休ハ何処に致しませう〔第十九章42才三〕  
 ○今日(こんにち)ハ能快晴致しました〔第廿三章81才四〕  
 ○今日(こんにち)も快晴で御座います〔第廿三章82才三〕  
 ○今日(こんにち)ハ些風立しました〔第廿三章82ウ二〕

《課題2》「ふだん何気なく交わしている「挨拶ことば」について考えてみました。実際「挨拶ことば」として現代日本人が交わす「オアシス」標語でいう「おはようございます」「ありがとう」「失礼します」「すみません」をテーマに私たちの日常生活そのものから問い直していきましよう。「あいさつ」は、得体の知れない人と人が出会ってまず交わすことが必要なものでしょう。相互の気持ちや意図や正体がちらっと見え始めるのがこの「あいさつことば」の得意とするところ。少なくとも自分が相手に敵意や害意を抱いていないという意思の表明ですからとりわけ多く発したい「話しことば」なのです。貴方は、今どのようなふうになさっていますか？